

学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究

1. 取り組み概略

本コロキウムでは、「学校現場で我々がいかに関わるのか」ということをめぐり、様々な角度から探索的に検討を行っている。具体的には、それぞれの赴いている現場での実践を検討する「現場体験検討会」をベースに、実際の学校現場を訪問して知見を得る「学校訪問」、我々の取り組みを研究の次元から検討する「学会発表」を通して、実践に实际的に寄与できることを目指して取り組みを行っている。それぞれについて簡潔にはあるが、以下報告したい。

2. 現場体験検討会

本検討会は、スクールカウンセラー、こころの教室相談員、心の居場所サポーター、学習支援員、適応指導教室指導員、教師など、様々な立場で学校現場において生徒児童・保護者・教師らと関わりを持っているメンバーから構成されている。具体的には、月1回程度のペースでメンバーが集い、それぞれの立場での実践体験を報告し合い、現場実践に寄与できることを目指した検討会を行っている。そこでは、具体的な対応の仕方や在り方についての検討のみならず、学校現場で活動することや、他職種の専門家と連携することに対して感じる難しさや不安についても触れられる機会となっており、参加者それぞれの現場実践の基礎を作る貴重な体験となる、グループ・スーパービジョンの機能も持っているように思われる。

3. 学校訪問

昨年度、一昨年度に引き続き、「特色ある取り組みを行っている学校現場」への訪問を行った。近年、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、いわば「外部」の専門家の関与の重要性が訴えられており、様々な研究がおこなわれている。我々もそのような観点から研究を行ってきた中で、「外部」と比較しての「内部」、すなわち、そもそもの「学校」そのものについて検討することの必要性が感じられてきた。このような問題意識に基づき、今年度は「大津島小・中学校」と「生野学園高等学校・中学校」への訪問を行った。

1) 大津島小・中学校

大津島小・中学校は、他の学校で何らかの原因で学校に通えなくなった生徒・児童が、離島にある少人数の学校へ転校し、「子どもたちが本来持っている力」を取り戻そうという目的のもとで導入された「離島留学」を導入している学校である。訪問時には、校長先生にお話を伺い、授業の様子や学校施設の見学、「回天」の歴史を持つ地域の見学をさせていただいた。印象深かったことは、「少人数」であることの利点を最

大限生かし、生徒児童が「自分の居場所」として学校を感じられるような工夫がなされていたことと、子どもたちの「本来持っている力」を信じ、それを発揮できるための様々な取り組みを行っていることであった。もともと不登校／不登校傾向であった子どもたちであっても、良い意味で特別視せず、彼らの持つ力を信じて取り組む姿勢は極めて感銘を受けた。また、歴史的にも大きな背景を持つ大津島に暮らす、地域の人々とも積極的に交流がなされており、島全体が広い意味での「学校」となっているような印象も受けた。すなわち、個人ベースの関係性に加え、大きな器としての関係性の意味を強く感じさせられた。



図1. 大津島小・中学校の風景

2) 生野学園高等学校・中学校

生野学園は、不登校経験者であることが入学（編入）の絶対条件であるという、不登校生徒のための学校である。訪問時には、学園長先生にお話を伺い、子どもたちと同じ場で給食をいただき、授業見学や施設見学をさせていただいた。先生方の姿勢で最も印象的だったのは、徹底的に個を尊重する在り方であった。個別性を大事にすることは多くの学校現場でも挙げられているスローガンではあるが、実際にはなかなか実践に移せないでいることが多い。それは、主にクラスという「集団」がベースとなる特性に必然的に付随する問題であろう。しかし、本校は集団性を重んじつつも、常に個から出発するスタンスであったように思われた。それはたとえば、姫路から学園までの長距離を歩く企画、牛を飼うなど、その難しさから大抵は実行に移しにくいようなことであったとしても、生徒自らが望んだときには協力し積極的に行った、という具体的事実にも現れている。そうした土壌で育つ子どもたちは表情がいきいきと輝いており、それは学園の取り組みの意義を感じる何にも勝る根拠であるように思われた。

4. 学会発表

これまでの学校訪問で得た知見をもとに、研究発表を行った（日本心理臨床学会第28回大会）。学校における「心理臨床的機能」について考察した。具体的には、心理臨床家は、学校という場の持つ「集団」の力を信じた関わりをすることや、それぞれの「学校」の持つ力を最大限に生かせるような観点を持つことの重要性について論じた。

（文責：森田 健一）